熊本地震被災者支援報告

平成 28 年 12 月 8 日―9 日にかけて熊本地震の被災者支援事業の一環として、調査及び支援活動を行いました。益城町木山→益城町杉堂→益城町テクノ仮設団地→南阿蘇村立野

12 月 8 日

この日は、熊本県立大学の柴田祐准教授の案内で、被災地の視察を行いました。

①益城町木山

台地状の地形の裾野に当たる部分が帯状に被害が甚大でした。視察したのは、主に、田園地帯と住居地域の間にある帯状の地域であったが、多くの家屋が被災しており、更地化したり、撤去作業が行われていたりしました。東日本大震災の時に比べて、より分別作業を細かくしているためか、撤去作業自体がゆっくりとしており、まだ多くの家屋が残っている地域が多い状態でした。

②益城町杉堂地区

杉堂地区は、山間の集落ですが、その殆どが被災しており、ライフラインの損害により集落ごと避難されている状況でした。見た目にはそれほど甚大な被害があるようには一見見えなかったですが、このように散逸した集落において、ピンポイントで、しかも全面的に被災している点が阪神・淡路や東日本の被災状況とはまた異なる点でした。下の写真は、溶結凝灰岩による石垣や杉堂地区の被災状況です。

この地域に限らず、多くの地域で見られたのは、溶結凝灰岩という岩石でできている石垣ですが、その多くは被災して形が崩れていました。多くのその土地の資源を活用した石垣などの景観がどの程度復旧、復興されるのかも大きな課題の一つといえるでしょう。

また、被災はしているが、非常に太い梁のある長屋（物置）が集落の景観的な特徴としてあげられます。熊本県の一つの伝統を表す歴史的資源ともいえる、これらの家屋のしつらえが、多くの地域で損傷を受けていることは大変残念でなことです。さきほどの溶結凝灰岩による石垣や、太い梁を活用した長屋の物置なども地域の財産ですので、これらをどのように復元していくかが問われていると思いました。

③南阿蘇村立野地区

南阿蘇村立野地区は住民の皆さんが大津町に避難しています。その仮設住宅に私たちは支援活動に伺いました。しかし、多くの住民の皆さんは毎日のように日中に家の片付けなどに立野地区にもどられているそうです。しかし、水供給の復旧のめどが全く立たない中、集落としての存続は非常に難しい局面を迎えています。

④大津町の仮設住宅

最後に立ち寄ったのは、大津町の仮設住宅です。ここでは、柴田先生やお世話をしてくださっているかたに次の日の段取りの打ち合わせを行いました。

仮設住宅　前日の打ち合わせ

以上が主な 8 日の行程ですが、前述したように、熊本地震は、飛び火状況が散在しており、しかもピンポイントで、集落が丸ごと被災していたり、水供給の復旧が難しかったりすることなどから、集落の存続が危ぶまれているなど、厳しい状況が続いています。

12 月 9 日

12 月 9 日、兵庫県立大緑環境マネジメント学科教員（林まゆみ）と兵庫県認定園芸療法士（浅井志穂）が熊本県大津町室地区にある室南口仮設住宅（78 戸）を訪問し、入居者の 25 名を対象とし、被災による緊張の緩和・コミュニティ形成をねらいとした園芸療法プログラムを実施しました。また、当日は、Kasei（九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト）の皆さんにご協力いただきました。

（参加：九州大学芸術工学部　朝廣和夫、Huang, Po-wei、大津　花、九州工業大学　木村圭祐）

フラワーアレンジメントでは、ガーベラ（希望・前進）や　ヒペリカム（悲しみは続かない）などの花言葉を紹介しました。また、クリスマスにちなんでヒバを使用し、香りでリラクゼーションを図りました。作品が完成した後に観賞会を行い、自己開示によるストレスの緩和を図り、住民の交流の時間を作ることができました。観賞会では自己紹介と作品にお題をつけ発表して頂きました。孫の名前や飼っているペットの名前、『空（そら）』『愛』『希望』など、それぞれの想いをテーマにしておられました。自身の作品を皆さんに見せる際は照れながらもどこか嬉しそうで、みんなの笑顔をひきだすことができました。

身近にあるハーブの活用方法を紹介するために、ハーブの芳香浴・手浴・ハーブティーの試飲を行いました。今回はローズマリー・ミント・ローズ・ローズヒップ・ハイビスカス・レモングラス・レモン

バーム・ジンジャーを使用しました。各種効用や活用方法など資料を用い説明しました。『ローズマリーは自宅にもある』と興味をもって説明を聞いておられる方もいらっしゃいました。お話を伺うと南阿蘇村水力発電所の設備損壊による水の流出による土砂崩れの影響を受けたとのこと、まだまだ復興の道のりは長く、継続した支援が必要なのだと感じました。

別れ際『ありがとう。楽しかった。』との言葉をいただき、ひと時でもつらい体験を忘れる時間を提供できたことで、復興の一助となれたのならば幸いと思います。

⑤西原村　板倉の家

9 日のプログラム終了後、九州大学の朝廣准教授に案内頂いて、最後に立ち寄ったのが、西原村にある板倉の家・ちいさいおうちプロジェクトと名付けられた、木造の家屋の推進プロジェクトです。これは、震災などで家屋が倒壊した敷地内にでも、建築が簡便で安価に立てられる「ちいさいおうち」を推進するものです。九州大学の先生方が、中心となって、進められています。

ちいさなおうちプロジェクト２

文責　林まゆみ・浅井志穂